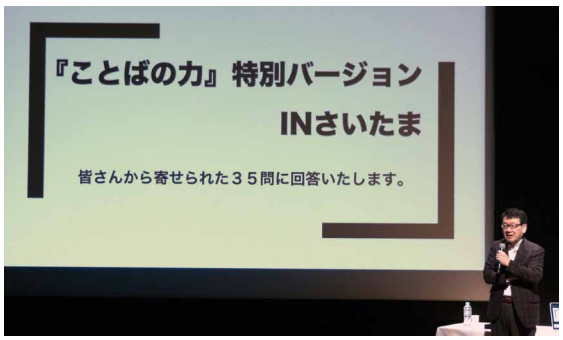
記念講演

重松清さんによる記念講演『ことばの力』特別バージョン IN さいたま

今年の記念講演は、幅広い年齢層の読者に愛されている重松清さんにお越しいただきました。新型コロナウイルスの影響で、オンライン公開のみとなりましたが、重松さんは、「(寄せられた質問に)一生懸命答えようと思っているというのを、僕のことばの力としてウェブ越しに受け止めてもらえたら嬉しいです。」と語り、講演会はスタートしました。



小説のストーリーや構想は、どんな時に思いつくの？

毎日の生活の中で「これって何でそうなっているんだろう」というのから始まります。1999 年に発表した『定年ゴジラ』(講談社文庫) は、昼間から町を歩いている背広姿でないお父さんが増えたな、と思ったのが第一歩。調べてみると、ニュータウンってだいたい同じ年齢・家族構成の人が入る。そうするとみんな同じように定年を迎える。ニュータウンで年老いていくということはどういうことなのか、というのを考えて小説にしました。

小説の主人公にモデルはいるの？

出会った人全てです。57 年生きてきて出会った人や小説で読んだ人などたくさんの人が自分の中で溶け合っています。2016 年から大学の先生をやっていますが、スマートフォンや Twitter と一緒に生きてきた世代と付きあうと「いまの時代って、そうなんだ」っていう発見が本当に多いです。やってよかったなと思っています。

どうして小中学生の気持ちがわかるの？

分かっていません。分かりたいです。分からないから知りたい、知るためのアプローチとして「こんなお話を考えてみました、どうですか」っていうふうに読んでもらっているというのが一番正直な感想です。

小説を書くときのポリシー、大切にしていることは？

世の中とか人間とか、全てのことが「自分が思っているよりも複雑だぞ」っていうのは忘れたくない。だから、なるべく自分の目線は低いところに置きたいなと思って書くと、優柔不断なお父さんや冴えない少年が主人公になったりしますが、そこからじゃないと見えないものがあると信じ書いています。

ことばを選ぶ際に気をつけていることは？

人間、特に子供は自分の思っていることを 100%言えるわけがない、というのは根っこにあります。「あのー」や「そのー」、うつむく姿勢にすごく大きなことばや、ことばにならないことばがいっぱい入っている。セリフだけで 100%伝わるわけがないし、言わせてもいけないと思っています。

作家になったきっかけは？

フリーライターをしていて、先生が生徒を思わずナイフで刺そうとした事件を取材したときに、その先生はナイフを抜いて事件になったけれど、息子を守るためナイフを抜かずに持ち歩いているお父さんだっているだろうと思いました。事件にならないそのお父さんの気持ちはノンフィクションでは書けない。そうしたら小説にしようと

書いたのが『ナイフ』（新潮文庫）です。普通の小さな出来事、その中にも絶対にある喜怒哀楽を書きたいと思い段々と小説にシフトしていきました。

明確なハッピーエンドが少ないのは意識的？

ノンフィクションやドキュメンタリーをやっていると、厳しい現実を生きている人がいるというのが分かります。そんな人が読んだときに「嘘くさいだろ」と怒ったり悲しんだりすることは避けたいと思っていて、僕はハッピーエンドで一件落着という小説にはできないんです。この姿勢は小説を書いている間はずっと変わらずにあるんだと思います。

読書離れが深刻だと言われていますが。

本は読んでないけど SNS でことばに触れている機会は結構多いと思います。問題は触れていることばが、とがってギスギスして攻撃的。一方的なことばばかり浴びている感じがします。特に若い子たちには、見たいものだけを見るのではなく、幅広い豊かなことばと出会って欲しい。「ムカつく」でもいろいろな表現があると言いたい。その解像度を上げていくことばを、提供したいと思っています。

ことばの力を実感できたこと、
ことばの力が欲しかったことを教えて。

難しい質問に答える時に、自分のことばがどこまで力を持つのか、説得力を持つのか。もっともっと文章の力、しゃべることばに力が欲しいです。なかなか実感はできません。それでもことばには力があると信じたいし、それを信じなかったら問答無用になっちゃう。問答には、ことばは必要だと思います。

コロナ禍で読む、オススメの本を教えて。

『弱いロボット』（岡田美智男・医学書院）
何にもできないロボットの話で、ロボットを研究している大学の先生の本です。できないことや人に頼らざるをえないことはマイナスじゃないと言ってます。弱さをしっかり見つめ、肯定する気持ちが大事だと思います。

自作の中で、最も思い入れのあるものは？

もし自分が死んで最後に一冊、棺桶に一緒に入れてもらうとしたら、自分の吃音をテーマにした『きよしこ』（新潮文庫）です。この本を抱いて、あっちの世界に行きたいなと思っています。

図書館に関する思い出などがあれば。

自分が子どもの頃、転校して最初にやることは図書室の場所を覚えること、町の図書館で貸出カードを作ってもらうことでした。図書館や本屋さんに行ったら、古今東西、聖書の時代から新作まであって、いろいろな国のいろいろな時代の名作が、自分の国のことばで読めるのはすごいことだと思います。

いま図書館や本を巡る状況は決して順風ではありません。図書館があって利用者がいて、本を書く人間がいて読む人がいて、そうやって大切なもののタスキを、新しい世代に次の時代に手渡していきたいと思っています。

最後に重松さんは、「小説を書いている人はいつも独りぼっちです。質問を寄せて、POP や色々なものに応募してくれて、読んでくれている人がいると実感できてすごく嬉しかった。またどこかで、今度はリアルでお目にかかれれば嬉しいなと思います。」と締めくくられました。

重松さんは、受け取り易いことば、わかり易いことばで、私たちを重松ワールドに誘い入れてくれました。聴く人それぞれの想いを巡らしながら心を開放できたのでは…？まだまだ書ききれないくらいたくさんの質問に答えてくださった重松さん、本当にありがとうございました。
（記録：埼玉県立三郷北高等学校　塚越 愛子）